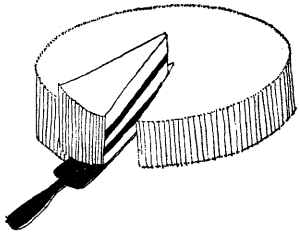
近代短歌に現われた子ども（十六）



大塚　雅彦

(35)佐藤佐太郎

佐藤佐太郎は明治四十二年、宮城県柴田郡大河原町の農家に生まれたが、幼児父母と共に茨城県多賀郡平潟町（現北茨城市）に移住し、そこで成長した。高小卒業後上京し、大正十四年岩波書店に入り長く勤めた。戦災を受け同店を辞め帰郷、昭和二十年九月上京して青磁社に勤めた後、二十二年永言社という出版社を独力で始めたが思わしくなくてやめ、その後著述のかたわら、副業として養鶏をしたりした。歌人として名を成してから文筆業を貫き、こんにち最も声価の高い歌人の一人として活躍している。

彼は大正十五年「アララギ」に入会、昭和二年以後、斎藤茂吉に師事し、その高足である。昭和二十年歌誌「歩道」を

創刊主宰し、現在に至っている。なお、志満夫人も歌人である。彼の作歌態度は茂吉門の俊足らしく写生に徹し、あくまでも抒情詩としての短歌の純粋性を追究する不動の立場を堅持しており、いわゆる〝純粋短歌論〟として知られている。あまり外形的な現象や動きに左右されず、〝自然〟と〝日常性〟の中に詩を求め、狭い〝個〟の詠嘆に執してうたい、社会生活の反映に欠けるという批判はあるが、深く鋭い観察の眼と精緻な技法とをもっている。最近では「〈写生〉は大切だが、写生に縛られないで自由に行く、というのがこの頃の私の考え方の一つだ」（「及辰園歌話(一)」――「短歌」昭57・2）と述べ、「感じたことを思い切って表現すること」（同）と断定している。師風随順から進んで新風を生み出した自信の程を示すものであろうか。

彼は処女歌集『歩道』（昭15）でいち早く歌壇の注目を浴びたが、『しろたへ』（昭19）、『立房』（昭22）等でゆるぎない地歩を築いた。歌集はこの他に『帰潮』（昭27）、『地表』（昭31）、『群丘』（昭37）等を始め、一番最近の『星宿』（昭58）に至るまで合計十二冊あり、『帰潮』では読売文学賞を、第十歌集『開冬』（昭50）では芸術選奨文部大臣賞を、また『佐藤佐太郎全歌集』（昭52）では第一回現代歌人大賞をそれぞれ受けており、更に、短歌の業績により日本芸術院賞を昭和五十五年に受けている。彼はその他の著作も多く、『純粋短歌』（昭28）のような歌論書、『短歌入門ノオト』（昭26）、『短歌の話』（昭32）、『短歌指導』（昭39）のような入門書、啓蒙的な手引書、『及辰園百首付自註』（昭49）の如き自註書、『枇杷の花』（昭43）、『及辰園往来』（昭51）のような随筆書、『長塚節全歌集』（昭26）のような編纂書等、すこぶる多岐にわたる。特に師の茂吉に関する著書も多く、『斎藤茂吉研究』（昭32）、『茂吉解説』（昭52）、『茂吉秀歌』上・下（昭53、岩波新書）、『童馬山房随聞』（昭51）、『斎藤茂吉言行』（昭48）等、茂吉研究家、愛好家の必読書となっているものも少なくない。また、岩波版の『鷗外全集』『斎藤茂吉全集』等の編集委員の一人であったことも、逸してはならない。

①一月もたたぬ赤子に話しをり滑稽ともつかず哀れともつかず

②幼子を芝生のうへに立たしめて幼子の顔いたく小さし

③人つどふ駅にゐしかばすこやかに足日焼せし少女をも見つ

④ゆくりなくわがをとめごの掌を見たり大きくなりし掌

⑤あるときは幼き者を手にいだき苗のごとしと謂ひてかなしむ

⑥童女にもときに重厚のかたちありわれに向ひてもの言はず立つ

①は歌集『歩道』より抄出。「嬰児」という一連にある。私はこの一連を短歌綜合誌に始めて見たとき、当時ひどく清新な感じがして感銘したのを記憶している。この歌も下句の口語会話調のような一見放胆な表現がえも云われぬ味わいをもつのに驚き、何度もくちずさんだものである。生まれて一ヶ月もたたぬ赤ん坊に大人の言うことがわかる筈もないが、それでも若い父親が、あやしながらその赤子に話しかけている動作が眼に見えるようで、不思議なユーモアやペーソスがあり、また、始めて父親になった作者の喜こびが揺曳しているようである。作者は昭和十三年一月結婚し、十五年一月長女肇子を得た。この一連は昭和十五年作で、この歌の次に「嬰児をはぐくむ妻は或時に牛の仔を吊すごとくあつかふ」という作があり、この歌の下句にも、若い母親である自分の妻の動作を、不思議なものを見るような思いで眺めている作者の微妙な気持が、フモールを伴って詠出されている。ちなみにこの処女歌集『歩道』は「二ヶ年の間に四刷を重ね、当時の歌壇に一つの時期を劃した」(由谷一郎『鑑賞佐藤佐太郎の秀歌』昭57・3)もので、フレッシュで鋭利、繊細な近代的抒情が高く評価されたのであった。

②は歌集『しろたへ』より抄出。当時作者は明治神宮表参道の同潤会アパートに住んでいて、休日など幼子(満一才の肇子)を神苑の芝生に伴って遊ばせることがあったというが、そんな場合の作であろうか。由谷一郎

氏は「〈立たしめて〉も〈いたく小さし〉も如何にも突きはなしたような言い方である。だがその〈軽簡〉な表現の中に深い愛情がこもっている。殊に〈いたく小さし〉など驚きを交えた喜びの声といった感じさえする」（由谷、前掲書）と述べている。ちなみに『しろたへ』には、幼子を扱った佳作が多い。「梨の香とニスの香として小さなる茶棚のまへに幼子ゐたり」「泣きながら負はれていでし幼子は背にねむりて帰り来るべし」「をさな子は驚きやすく吾がをればわれに走りて縋る時あり」等である。

③は歌集『群丘』より抄出。昭和三十三年作で、「街」一連にある。この年、作者四十九才である。夏の日の駅頭の属目であるが、一連の中には清州橋や勝鬨橋等も詠まれている。一首の眼目は「すこやかに足日焼せし」であるが、作者は自ら二人の娘（当時十八才と十六才）を持っていただけに、少女の姿なとが他人よりも余計に目についたのかもしれない。駅の雑踏の中で、他人があまり眼をつけない少女の足の日焼を観察し、しかもそれを「すこやかに」と感受している。あたたかい心のこもる歌である。

④も『群丘』抄出。「掌」一連にあり、昭和三十五年作である。自註によると、この「わがをとめご」は次女洋子であるから、当時十八才である。思いがけなく娘の掌を見たら、気づかないうちに何と大きくなっていたことか、というのであろう。人は、他人の掌などをじっくりと見ることなど、日頃あまりしない。まして自分の娘の掌など尚更だ。それをたまたま見て娘の成長を感じ、驚いている作者。男親の愛情というものが滲み出てくるような歌である。「掌」という語の重出も気にならない佳品だ。

⑤は歌集『形影』（昭45）より抄出。「幼児」一連の中にある。昭和四十三年作で、作者は五十八才になっている。つまりこれは孫の歌である。一般に誰でも孫の歌には大体、よい作品がない。他愛なく対象に溺れてしまって甘くなり、緊張を欠き放恣になるからだ。だから「孫の歌は絶体に作らない」という歌人もいる。だが、この

佐太郎の孫うたは面白い。手に抱いた幼な児を『苗のごとし』といった作者の「感受のみずみずしさに眼をみはる思いがする」「いいようのないやさしさが一首をつらぬいている」と長沢一作氏は述べている（今西幹一・長沢一作、『佐藤佐太郎』昭56・1）。「〈苗〉はまだ幼く弱いもの、独り立ちの出来ないものである」と自註にある。この比喩は巧みで、筆者はなぜか「人は葦のごとく最も弱いものである」という哲人パスカルのあの有名なことばを、この歌に思い出す。なお、「中国詩を読んでいるから、こう言えたが、中国詩を読んだ誰もがこう言ったのでもない」と作者の自註にあるが、たしかに「苗のごとし」の表現には「背景に中国詩があるものの、この把握は作者の直観によるものと私は思っている。この直観が素晴らしい」と加古敬子氏が述べている（「短歌」昭56・5「特集・佐藤佐太郎」）通りであろう。なお、この歌の次に「いつよりといふけじめなく幼子の音たしかにて階段を踏む」という一首が続いており、これも鋭い聴覚をはたらかせた印象にのこる歌である。

⑥は歌集『開冬』（昭50）より抄出。「初夏日々」一連にあり、昭和四十六年作である。幼児にも幼い心に怒りでもたたえているのか、対者である作者に向ってものも言わずに立っている。その状態を「ときに重厚のかたちあり」と述べている。幼児の生態の或るときを、このように把握した歌は珍らしいのではないか。何か思想性を含んだような表現であって、しかもそれが一首の中で遊離していない。幼児への玄妙な思いを湛えた作である。なお『開冬』には「みはりたる二つの瞳そのなかに老いて恥多き吾は映らん」「あやつりの人形のごと嬰児のみちたりて腕をふるさまあはれ」「菜の花の咲く冬晴の渚みちあゆむ幼は今年足つよし」等の幼子をうたった佳什がある。

(36) 近藤芳美

近藤芳美は本名芽美、大正二年、父の任地である朝鮮慶尚南道の馬山で生まれた。父は銀行員であった。十二才の折に馬山小学校を退き内地に引揚げ、広島市の祖母

の家に寄寓し広島二中（現観音高校）を経て旧制広島高校をおえ、東京工大建築科に入り昭和十三年に卒業した。建設会社清水組に入社、建築技師として京城に赴任。現地で相思の中村年子と結婚、その昭和十五年に東京勤務となり帰国。同年九月広島連隊に召集、中国に出征したが、結核のため広島病院に転送され、召集解除となった。戦時中は浦和に疎開、戦後上京し引続き清水建設に勤務し、昭和四十八年（六十才）これを退職、神奈川大学工学部教授（工学博士）となり、今日に至っている。

彼は中学時代から作歌したというが、本格的な歌への熱中は、広島高校に入り同校短歌会に所属し、更に「アララギ」に入会してからであろう。高校二年の折に療養中の中村憲吉を広島郊外に訪ねて師事した。憲吉没後は土屋文明の指導を受け、文明門下の逸材となった。終戦直後の混沌たる時代にいわゆる「新歌人集団」（この集団の短歌史的意義に就ては、集団の仲間の一人である加藤克巳の著『新歌人集団』昭57・9参照）の代表的存在として、新歌風を樹立した。昭和二十六年に歌誌「未来」を創刊主宰して現在に及んでいる。昭和三十年から朝日歌壇の選者として今日もそれを続け、また、昭和五十二年から現代歌人協会理事長となり、歌壇のまとめ役として重きをなしている。ちなみに年子夫人も歌人である。

彼の作風は、処女歌集『早春歌』（昭23）などではみずみずしい清純な相聞歌によって読者を甘美優婉な世界に誘い、妻をうたう愛のうたは後の諸歌集にも尾を曳いてゆくが、続く『埃吹く街』（昭23）、『静かなる意志』（昭24）、『歴史』（昭26）等で、不安な時代に生きる「誠実なインテリゲンチヤの心情」を詠出し一種の〝思想のうた〟を呈示し、また、戦後の大都市の酷薄無慚な世相や、終戦直後の荒廃した光景を鋭角的にとらえてうたった（拙稿「近藤芳美」――吉田精一他編『現代短歌評釈』昭41・2参照）。彼自身、歌論集『新しき短歌の規定』（昭27・4）で、「新しい歌」とは「今日有用の歌の事」で、それは「今日この現実に生きて居る人間自体を、そのままに打出し得る歌」と規定し、その要素として「健

康な表現をとること」「簡潔であること」「素材派であること」「作品自体の中になまなまとした思惟がある事」等を挙げている。また、彼の門下の岡井隆は「近藤芳美から教えられたことども」（岡井『近藤芳美と戦後世界』昭56・8）で、それを(1)生き方（いかに生くべきか）の提示、(2)思想を歌うこと、(3)占領下の日本という認識、(4)「主義」と「生活について」――の四つを挙げている。

近藤の歌集は上記の他に最近の『聖夜の列』に至るまで計十三冊あり、また『定本・近藤芳美歌集』（昭53・1）も刊行されている。歌論集も上記の他に『現代短歌』（昭28）、『茂吉死後』（昭44）、『短歌思考』（昭54）等があり、研究書的なものに『土屋文明』（昭36）、『石川啄木における文学と生』（昭39）、『土屋文明の秀歌』（昭50）等、自叙伝的小説に『青春の碑』第一部・第二部（昭39）、鑑賞的解説書に『愛の歌』（昭39）、『無名者の歌』（昭49）、随筆集に『アカンサスの庭』（昭40）等、著書はすこぶる多い。

①一日をなすなき少年ヴァイオリンを弾きに行く彼らの晩餐のため

②測量に共に苦しみし金少年蛙を焼きて吾に喰はしめき

③胸小さき裸の少女歌ひ合ひ灯ともれば酸き人の匂ひよ

④河合教授追はれたりし日知らむとし思ひつめたる少年は来る

⑤戦争を止むなしと皆声合はす小学生らの或る日のつどひ

⑥秘めし思想も求めし戦死も吾のみ知り今日聞く君が遺し児のこと

⑦盾の下に打たるる少女の面しろく雨に群衆の走るひとかた

近藤夫妻には子がない。そのせいか幼な児などをうたった歌はあまりない。その代り、他人の子である少年少女をうたった作品は、抄出諸歌の如く少なくない。①から③までは歌集『静かなる意志』より抄出。①は「夜毎に」の一連にある。どんな少年なのだろうか？　昼間は

何もしないで、夕方になってどこかへヴァイオリンを弾きに行く、それも彼等の夕食を得るためだ、というのであろう。貧しい少年をうたってまさしく終戦直後の風俗を描いたユニークな作だ。②は「動乱の日」一連にある。近藤は戦前に朝鮮の建築現場で働いた。その折一緒に働いていた金という少年を、昭和二十三年の時点で思い出してうたっているのだ。蛙を焼いて作者に喰わしたと少年というのが強烈な印象を与える。③は「雨のあと」一連にある。どこか劇場か酒場内の作か？　舞台で歌い合う胸の薄いまだ少女の裸かの踊り子（歌手？）と、客席で聴いている作者。少女への愛憐の情。そして灯がつくと思い出したように襲ってくる酸い人間のむれ臭さ。「灯ともれば酸き」が、やはり迫力にみちた表現として読者を衝つ。④は歌集『歴史』の「海に低き日」一連にある。有名な河合東大教授追放事件（粕谷一希『河合栄治郎』昭58・5等参照）を知ろうとする少年のひたむきな表情。⑤は歌集『冬の銀河』（昭29）の、同名の一連にあるが、これは戦慄すべき光景ではなかろうか！『きけわだつみのこえ』の戦没学生がこのさまを見たら、どう言うであろうか……。⑥は歌集『異邦者』（昭44）の中にある。昭和三十六年作。「秘めし思想」はマルキシズムで、その思想の持主だった友人が挫折感か何かで志願兵にでもなって征き戦死した、ところが彼の愛する女性は妊娠していて遺児が生まれていたのだろう。「胎に置いたままの出征と戦死をあわれに思っている感情が十二分に出ている」（田井安曇（あずみ）『近藤芳美』昭55・5）歌だ。⑦は歌集『遠く夏めぐりて』（昭49）の「六月」一連にある。この一連はデモ隊と機動隊の衝突を生ま生ましく描き、後者の「盾」の下に打たれ顔面蒼白の少女や、その背後の群衆を⑦は描出している。

（お茶の水女子大学）